

中村武羅夫

德田秋江氏



徳田秋江氏



体の痩せて背のやや高い人である。鼻は高く、頬はこけて、濃い髪は思い切り長く刈って分けた。身体が痩せたのと、其風采を余りに関われないので、鳥渡会ちよつとった時は、気の毒な程貧弱に見える。人物の影が薄いような気がする。然し、それは初めの些つと見だ。能く見ると眼の光りが鋭い。人を見るその眼色が平凡な人とは違う。何所か非常にデリケートなところがある。神経質な暗いところがある。

自分は初め、秋江氏に或る人のところで会った。その或る人の魁偉な姿にくらべて、秋江氏を見すばらしく思つたが、能く見て居る中に此の人の鋭いところが見え出した。頭の中が恐ろしく動揺して居るらしい。絶えず何かに襲われるような不安に心が慄えて居る。何を見ても、何に臨んでも、世の中のこと——人間の総べてに不平があり、不安があると云つた風の人だ。しつきり、無しに心がいらいらして居る。どっしりとした落着さがない。何物にも不平があり、何物にも反抗し、何物をも呪い、何物をも破壊したい——世の中を敵視した人だ。然し、悲

しいことには、秋江氏には強い所がない。思い切って何事も自らやると云ったように、積極的のところがない、不平を抱き、反抗をし、世を呪い、人を呪い、破壊を願いながら、それを実行し断行する勇氣が無い。力が無い。然うした今にも破裂しそうな熱烈な思想を抱いて、それをじりじりと圧えて行く人だ。実行し、断行する勇氣は無くとも、せめて空吼えにでも吼え狂えれば好いが、それも出来ない。外部の然うした圧迫を強く感ずれば感ずる程、心は反抗の熱に焼けながら、一層深くその反抗の力を逆に、じりじり中に抑えて忍ぶ——充り、力学上で

云う歪力である。ゼンマイは捲かれば捲れる程、その反撥力は強くなりながら、だんだん捲れて行く、秋江氏は恰度然うした性格の人らしい。破裂しよう、反抗しようとかみながら、而もじりじり捲き込まれて行く。決して反撥の力が無くて、捲き込まれて行くのでは無い。捲き込まれれば、捲き込まれる程、益々反撥力は強くなつて行くのだ。強くなつて行きながら、反撥することも出来ずに捲き込まれて行くのが、情けないゼンマイの運命だ。秋江氏が丁度それだ。四囲の圧迫を感じて、反抗心が強くなれば強くなる程、その反抗心を押えて行く。充



り消極的に強い人と云うことが出来る。

然うした反抗心をいらいらしながら抑えて行く結果、秋江氏には何所か、皮肉なところがある。反抗心を抑えて、それを破壊することが出来ない、それで仕方なく皮肉に出る。反抗心をじつと抑えながら、フフンと鼻の先で笑って退ける。秋江氏には余裕がない。その皮肉は引き詰った皮肉である。秋江氏は夏目漱石氏のように、超然として皮肉を言う程、未だ時代に遠ざかることが出来ない。漱石氏の皮肉は碁打ちの皮肉である。お茶を飲みながら、煙草を吸いながら、乃至小便をしな

がら言える皮肉である。ゆ、とりのある皮肉である、笑いながらぼ、つり、ぼ、つりと言つて退けると云つたような皮肉である。故に漱石氏の皮肉は小面が憎い。之れに反して秋江氏の皮肉は苦しい皮肉である。真面目な皮肉である。人と議論して、口先でかなわず、じくじく口惜し涙を滴しながら云う、切ない皮肉である。涙の含まれた皮肉である。だから厭や味なところはあつたが、然し、切実な皮肉だ。人にえ、ら、屁と云うものがある。腹の上に重い物を載せて、其重力に圧迫されて思はず出る屁を、自分の国ではえ、ら、屁と云う。這麼こんなた、と、え、では失礼かも知れんが、

一番適切だから自分は敢て云う、秋江氏の皮肉は恰度此のえら、屁である。漱石氏の皮肉は、麦飯を食ったり、焼芋や炒り豌豆を暴食して、腹の張った時に気持ち好くブンと出る放屁である。そして放った後で当人はフフンと笑う。成程当人は腹の中の悪瓦斯を一発の放屁に依って放って、誠に気持ち好かろうが、傍で聞く人は癩だ。小面が憎い。然し、何となく又滑稽味もあつて、小面の憎いながらもおかし味がある。時には聞く方でもフフンと笑いたくなる。漱石氏の皮肉は茶の趣味を帯たひょうんで居る。菓子で言えば塩せんべいだ。軽いところがある。秋

江氏の皮肉は苦しい切ない、真面目な皮肉である。心中のいらいらした情が、抑えんとして抑え切れず、抑えながら余儀無く出る皮肉である。当人も真面目だ。聞かせられる人も真面目だ。然し、皮肉本来の意味から云って、秋江氏の皮肉は、時に厭や味として聞える。弱者の声として聞える。之れ余裕の無い皮肉だからである。秋江氏が未だ超然となり得る程、而く現代離れが出来ないからだ。超然となり得ざるからだ。暢気になれないからだ。

秋江氏は友と会って痛飲しながら、不平不満を吐露し、気焰を吐くと云ったようなことがないであろう。で、尚

更に不平や不満が腹の中でむしやくしやくする。いらいらする。その鬱結する情をやるに由なくて、それが遂に苦しい皮肉となつて出ることがあるのであろう。

自分は秋江氏の何所か、斯う亡くなつた斎藤緑雨に似たところはないかと思う。緑雨に或る一面酷似した性格をそなえながら、未だ緑雨ほど自惚れることが出来ず、よがることの出来ない人であるまいか。

斎藤緑雨は未だ自己の真価を解さなかつた。余りに自己を過大視した。故に勇氣があつた。吼えた。狂つた。誰れにでも食つてかかつた。秋江氏は現代人の通有で、

己れを能く解して居る。故に縁雨ほど盲目蛇でない。無鉄砲になれない。

自惚れたものには勇氣がある。自己の真価を自己以上に買い被った者には何物をも恐れないと云う強いところがある。世の中の人々は斯う云う人を見て、盲目蛇と云う。無鉄砲と云う。自惚れと云う。盲目蛇でも、無鉄砲でも、自惚れでもその勇氣が嬉しい。強いところが嬉しい。自惚れも当人に取っては動かし堪い自信である。現代人——殊に青年の通弊は、己れを観ると云うことが余りに明らかになつて来たことだ、己れを見るの明あるの

は嬉しいことだが、今少し自惚れがあつて欲しい。

繰り返して云う。秋江氏は故緑雨に似たところがある。然し、緑雨ほど自己を買い被るに、秋江氏の己れを観るの眼は、余りに鋭い。故に緑雨のように同じ不平不満の子でありながら、緑雨に比して、更らに一層其苦悶が深い。





日本文学電子図書館

---

現代文士廿八人

著者：中村武羅夫

制作者：宮澤一郎

出版社：日高有倫堂

明治42年7月10日 印刷

明治42年7月16日 発行

---

日本文学電子図書館